

あうる

3年振りに
リニューアルして!!

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

一大砂金地

明治二十九年（一九一六）、北見枝幸地方に一大砂金地帯が発見され、全国各地から一攫千金を夢見て、この地に入地する者が相次いだ。三年後には砂金掘りの数、五千人以上。作業をする際に、体がぶつかりあって屈伸さえ自由にならなかったという。

砂金掘りたちの収入はというと、幌別川支流のペーチャンで、「連日一日二百gを採取した」という記録がある。当時地元での砂金の値段は、二百gで二百十円ほど。この頃の教員の初任給が八円、大工の手間賃が一日六十六銭、白米1kg一円十二銭だったというから、大変な実入りであった。

明治三十三年（一九〇〇）には当時日本最大となる二百五匁（約七百七十g）の砂金塊が採取され、さらに産金熱を煽った。しかし、このブームも十年ほどで衰えを見せ、この地に見切りをつけた砂金掘りが次々と各地へと散っていった。

八十土川の砂金

紋別へ移住し、漁師となっていた菅原栄之進もその一人であった。彼は地道に漁業に従事していたが、人跡未踏の原始林の中で光る砂を探し求めた。かつての経験を活かす必要が生じた。それは明治三十八年（一九〇五）の年の瀬。不漁続きで次第に生活が苦しくなってきたため、八十土川へと砂金探しに出かけたのだ。

枝幸で砂金掘りを経験していた菅原である。八十土川の砂利が枝幸の砂金地と非常に良く似ていることに気がついた。ここに間違いなく砂金があると確信した彼は、ドンドン川を遡り、ついに一m足らずの小さな滝壺に堆積している砂金を発見。寒い冬にもかかわらず、三日野宿を重ね、約一貫の砂金を採取し、ホクホク顔で家に持ち帰った。

その後の街での豪遊振りから、「きつといい砂金場を発見したに違いない」

北海道 秘話 1 北 歴

紋別八十土金山

もうひとつの——ゴールドラッシュ

やさし

オホーツク沿岸は、かつてゴールドラッシュの地だった。北見枝幸地方の一大砂金地帯発見に続く、紋別八十土（やさし）の第二次オホーツク・ゴールドラッシュは、騒擾事件を巻き起こしながらスタートしていった。

という噂が瞬く間に紋別中に広まった。採取場所に向かう菅原を密かに尾行して、砂金のありかを知った者もいたという。

「紋別組」vs「山県組」

八十土金山の話が伝わると同時に、鉱区出願競争が始まり、大いに紛糾した。

最初に出願したのは、漁師・菅原の親方と仕込先の海産商。続いて「紋別

組」「山県組」と呼ばれる地元グループが出願し、第二次オホーツク・ゴールドラッシュは、紋別八十土を舞台に出願に伴う騒擾事件を巻き起こしながら、大きく動き始めたのである。

明治四十年三月、第一発見者の菅原と「山県組」の中村定三郎という者に許可が下りた。しかし、許可区域が一部重複したため、案の定、騒動が勃発した。

「山県組」は百数十名の作業員を動員し、採取に取り掛かろうとしたが、菅

原らは「紋別組」と合同してこれに抵抗、作業の即時中止を要求した。しかし、「山県組」がこれを断固拒否したため、穏やかならぬ事態となった。

紋別の警察分署も、現場に巡查二名を派遣して警戒に当たった。

なかなか採取中止要請に応じない「山県組」。業を煮やした「紋別組」も紋別・湧別から百数十名の作業員を集めた。夜半に大挙して現場へと向かった。殺気立つ双方。睨み合いは続く。

現場の巡查は、網走・湧別両署に応援を求め、紋別分署長も現場に急行した。

分署長は、双方の主だった者を呼んで、「解散命令に従わなければ直ちにそれ相應の処分をする」と厳命したため、ようやく「山県組」が採取を中止。それを見て「紋別組」一同も解散し、ようやく山は静かになった。当時採掘地に集まった人数は四百名以上、派遣された巡查は十一名を数えた。

だが対立はこれで終わったわけではなく、翌年には、遂に四名の逮捕者を出すに至った。

一件落着

結局、紛争は約一年続き、最後は「紋別組」と「山県組」とが共同で採掘をする「八十土共同砂金組合」を創設することで話は一件落着、組合経営による採掘がスタートした。採掘現場は大いに賑わい、全盛時には三百名余りが入山していたという。

この「八十土共同砂金組合」経営による採掘は大正五年（一九一六）まで続けられた。しかし、次第に産出量が減り始め、採算が合わなくなったため、大正八年、住友総本社に砂鉱権を売却、住友は昭和九年まで稼働を続けた。

八十土金山の産金量は、枝幸砂金を凌ぐものであったと伝えられている。金脈を求めて探し回る砂金掘りたちの手によって日本一の「鴻之舞金山」が発見されたのは、八十土の騒擾事件から八年後のことであった。



北海道では第一級の
狍犬(明治23年奉納)と
北海道神宮境内にて

丸浦正弘さん

きっかけ

山登りをして雪原の写真を撮った、そこに小さな木があり、枝が右側になびいていました。その写真のタイトルを、何気なく「雪原の指標」と付けたら、友人に「あれ、丸浦ってこんな見方するんだ」と言われたことがありません。特に訓練したわけでもなく、無意識のうちに違った視点でモノを見てしまつたことが多いですね。

その延長が街での路上観察になり、八年位前に神社の狍犬がふと目にとまった。私、木彫りの仕事をしていたので、物の形にこだわりがあるんですよ。狍犬ってよく見ると面白い形をし

ている。それから狍犬に興味を持ち、

一つ二つ見ていくと、顔の形だとか姿がいろいろ違うんです。「あれ、面白いな」と思いだした。単に見ているだけではつまらないので、そこに刻まれている文字を見てみると、例えば「昭和三年、御大典記念」などと彫つてあるんですね。「御大典」ってなんだろう。天皇陛下の即位の儀礼だ。そのように、刻まれている文字にもいろいろ興味が深まってきました。

最初は面白解釈でやっていたんです。ところがそのうち、歴史的深みはある民俗的広がりもある、これは自分できちり調べたほうがいいなと思い、始めたわけです。北海道内で狍犬を調べた

人が誰もいないんですね。あくまでも趣味の一環で、義務は一切なし。気楽に楽しみながらやってきました。いろいろな所を回りますと皆さん親切に「あそこ神社だった、この道を行けばあるよ」などと、教えてくださって「楽しかったな。嬉しかったな」という出合いの積み重ねがたくさんありましたね。

北海道の狍犬の特徴

空知地域を見ると、奉納された狍犬の数が飛びぬけて多い時期があるんですよ。盛んだった頃の炭鉱がベースにあるんですね。北海道の狍犬は、地域産業とか、開拓の歴史とか、江戸時代

には北前船交易によって海岸線のほうにあるとか、時代の様子をかなり反映しています。

何百年という伝統がある道外の石工さんと違い、北海道は新しいので、明治以降の狍犬を例にすれば、石工さん造形上の規則にしばられずに作っているのが割と多いんですよ。親方の指示がどこの、キッチリと決まった形に造らなければならぬ、などという本州とは違って、気楽にやっている北海道には面白い狍犬がいっぱい出ているんですね。例えば「岡崎狍犬」というのが愛知県にあるんですが、形が決まっているので、誰に言わせても面白くない。そんな物が身の回りにいっぱいあったら、そのうち飽きがきたでしょうね。

その点、道内の狍犬はホント面白いんです。狍犬さんたちに、励まされたといつか、勇気付けられたといつか、もっとドンドン調べようと、たきつけられた面がありますね。

狍犬への思い

心の栄養、ビタミンでしょうね。生活の中の潤滑剤になってくれましたし、豊かさを与えてくれました。実生活にはそれほど役立たないんですが、ものすごく栄養になっている。私、お金がどこのどこのというよりも、楽しいほうを大事にしたい。楽しんだから狍犬の本が出版できました。

私の趣味は、山登りなんですけれど四十一年以上続いている。それは楽しいから。重い荷物を背負って歩く苦しさ

があっても、それ以上に楽しいんですね。楽しいから続けられている。路上観察の一環として狍犬に発展したのも同じですね。

仕事と楽しさを分けるというのではなくて、私の中では、仕事も遊びも一緒に考えたい、一緒でありたい。凝り固まると視野が狭くなるんです。できるだけいろんなことにチョッカイ出しながら、義務じゃなくて、楽しみながらやれるように心がけていけばいいんです。私も、狍犬のことで言いますと、毎日チョコチョコ文章を書いていました。楽しみながらの「苦勞のない継続」。それは難しいかもしれないですが、その姿勢へと自分を持っていけたらしめたものです。

私は、興味を四方八方に広がっていますから、趣味がとても多いですよ。何にでも興味を示していれば、それがうまく栄養になるものなんです。必ず世の中、森羅万象、繋がりがあって動いています。興味を四方八方に広がっていくと、それが必ず何かに繋がって栄養になり、自分の肥やしになっているんですね。

本の一行を書くのに、背後に十行ぐらゐの栄養素があれば素晴らしいなと思つてます。できるだけそういつ姿勢でいるようにしようと心がけています。

丸浦 正弘 まるのつら まさひろ

一九四二年十二月 香川県生まれ。会社勤めを経て、一九七〇年より北海道に住み、木彫小品づくりに携わる。若い頃からの山歩きをはじめ、路上観察などを趣味としている。

Dilettante 悠々人語録

狍犬の調査は、遊ぶ楽しさでやったようなもの。「せねばならぬ」ということではなく、「してみたい。じゃあしてみよう」という世界。全編それです、狍犬の始めから終わりまで。「ほっかいどうの狍犬」を出版した丸浦正弘さんの狍犬ワールドです。

MY OLDIES は活字の



かつて『活版印刷』という、えらくヘヴィな印刷方法があった。文字通り重い印刷版なのである。つまり一個の文字が、鉛合金で出来ているからなのだ。簡単な例として、スタンプのゴム印を考えてみてほしい。あれが鉛で出来ているようなものを「活版」という。

一個の文字が棒状の鉛合金で、それを曲芸のような手捌きで職人が、ピンセットで木枠の中に組み上げ文章にしてゆく。印刷の版になるため組むときは、裏返しの鏡面状態に並べてゆくのがこれまた、すごい。当然一ページの組版ともなると、重くて分厚い本くらいにはなる。何百ページもの印刷になると、工場のスペースは活版が山積みになり、ストックしてある活字棚とともに、超重量に床を軋ませながら工場全体を埋め尽くすのだ。

一九六〇年代が終わる頃までには新聞さえも、この活版印刷をやめてしまった。新しい紙原稿になり、文字は写真植字という印画紙にプリントされたものに変わってゆく。

そして今は、ご存じの如くパソコンによる原稿制作になり、出力と同時に版が作られるまでになっている。十五世紀にドイツのヨハネス・グーテンベルクが発明した活版印刷は、じつに五百年にも渡って、印刷を支え続けたのである。

彼が初めて印刷したのが聖書だったことは、その後の印刷の発展と無縁ではない。なぜなら聖書ほど売れた印刷物はないからだ。この最

初の活版印刷物は『四十二行聖書』と呼ばれ、紙判が百五十部、羊皮紙判三十五部が印刷されたという。世界で現存しているのは四十八部だという。

ドイツのマイントの博物館で実物を見たことがある。A3ほどの豪華本で、赤、青、黒の文字組みが実に整然としていて美しい。市場に出せば十億円は下らないという。

この当時の印刷技術をそのまま保存しているベルギー・アントワープ市の博物館で、グーテンベルクの技術を継承したクリストフ・プランタンの工房跡で展示、実演が行われている。

日本でも、仏教経典を木版刷りにした印刷物なども、過去にはあったようだが、細かい漢字は消耗もはげしく、アルファベットの数少ないや簡単さには、かなづくも無い。なにより、聖書ほど需要のある本はなかったといえよう。

印刷会社さんと初めてお付き合いさせていただいた頃、その工場の一部屋にまだ、活版印刷の設備が残っていた。案内してくださった当時の課長さんが言っていたものである。「どこかの博物館でも引き取ってくれないかなあ。」

その後、どう処分されたかは知らないが、活版の機械類は姿を消した。他人様の都合を考えないで言わせていただければ、惜しいことをしたものである。

(上野修一)

NEW PUBLICATIONS

ちょっと気になる一冊 新書紹介

高橋景保と

「新訂万国全図」

新発見のアロウスマス方図

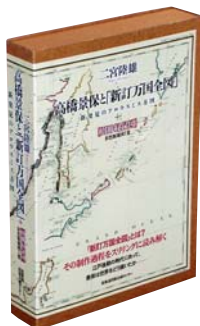
〔別冊収録図 彩色版地図7葉〕

二宮陸雄 著

定価 一四、七〇〇円

北海道

出版企画センター



天文方・高橋景保が編集責任者として刊行された銅版『新訂万国全図』(文化七年)は、江戸期における科学史上、最高の傑作といわれる。その理由は、当時のヨーロッパや日本において、カラフト島はサガリイン島とは別の島なのかどうか、さらにその北部は半島か離島かの混乱が長く続いていた。それはいずれの国も、そして誰もが容易に解明できない現実があった。それが間宮林蔵によって

発見の経過を述べ、景保が世界図作成までにどのような外国の地理書や地図を利用し、それをどう世界図の中に位置づけていったか、景保の苦心を記述して余すところがない。また、この世界図は奥州須賀川の画家、永田善吉による銅版作製であったが、当時の日本における銅版技術にも過不足なく触れている。そして、内外の多くの地図・地理書のみによる編集図に終わらず、間宮林蔵をして

てカラフト島は一島であり、海峡を隔てた離島であることが実証され、このことによって世界で最も正確な世界図誕生となったからである。景保が底本として使用した世界図は発行されて間もないイギリスのアロウスマス世界図(メルカトル図法)であったが、この地図は日本には現存せず、長く不明のままであったが、著者はその図を東京で発見し、初めて詳細な研究が可能となったのである。本書は、アロウスマス世界図の

カラフト島探検という実地調査の成果をいち早く採用した点に、景保の学者としての見識を高く評価している。『新訂万国全図』は、地図史上有名なものであり、古くから優れた論文が数多く発表されてきたが、本書はアロウスマス世界図を初めて具体的に比較しての論考であり、アロウスマス図・新訂万国全図など七枚の地図を大型カラー版として添付する。今後、重要文献として長く読まれることであらう。

(高木崇世彦)

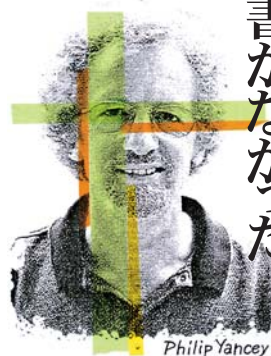
1 断と偏見の一本

フィリップ・ヤンシー著
山下章子訳

『だれも書かなかった
イエス』

定価 二五二〇円
いのちのこえ社

上野修一



Philip Yancey

フィリップ・ヤンシーはアメリカのクリスチャン・ジャーナリストである。日本では耳慣れない職業名ではあるが、宗教誌の編集に携わり同誌にコラムや記事を書くことをなりわいとしている。と同時に歴としたクリスチャンであり、宣教師であるともいえる。アメリカでは最も著名なクリスト作家の一人だ。私はクリスチャンではないし、特定の宗教を信ずる者でもないが、なぜか彼の著書を四冊も所持している。正直に言ってもらったものである。

欧米文化がどうしても今ひとつ理解できなくて、読み散らしたのが聖書、クリスト教関係の本である。何十年読んでも肝心なことが分からず信仰も持たないままに過ぎてきたが、十五年前から親交のある友人でアメリカ人宣教師のマイク・マギンティ氏のおかげで、初めて「神」の概念が、おぼろげながらも分かってきたような気がする。その彼から贈られたのがフィリップ・ヤンシーの著作なのである。

ヤンシーの視点は少々風変わりである。本格的なミッションカレッジを優

秀な成績で卒業し、筋金入りのクリスチャンであるにもかかわらず彼は、常に自分を懐疑論者と告白する。さらには「教会への嫌悪が内在する」とさえ自分を分析するのだ。このような彼の客観的で冷静なジャーナリスト根性をベースにしてこの本は展開されてゆく。対照的なクリスチャン作家のC・S・ルイスのような、ゆるぎない信仰で武装したものとは比べ、私のような不信心者には説得力がある。ヤンシーの著述には、信仰を拒絶する人、疑う人、揺るぐ人々からの取材が次々と登場するのだ。ある意味での信仰告白集にも見えるのだが、それらに対して謎解きをする如く自信を持って説得してゆくのがC・S・ルイスなら、信仰弱者に共感しながら検証を重ねてゆくのがヤンシーの手法だといえる。

彼は『だれも書かなかったイエス』の中でこう述べている。

「私が『使徒信条』を肯定していることをはっきりさせておこう。だがこの本では、そついった明瞭な陳述を越えたとここに戻りたいと思っている。」

さらに「本書において、私は自分自身の話ではなく、イエスの話をしようと思った。だがイエスを探て行くと、どうしても自分自身を探るところに行き着いてしまう。」

なにより彼の語り口には難解さがないことだ。さらに彼の検証は、決して聖書の記述からブレない。あくまでも聖書を唯一の記録として、その時代の民衆の気分に同化しようとする民俗学的な歴史検証を試み、それらの中から信仰の本質を探てゆく。

本書の続刊『だれも知らなかった恵み』を読んだとき、私はやっと欧米クリスト教文化の本質を、垣間見たような気分になったものだ。

日本人が最も理解し難い、仏教や神道とは異なる『神』の概念が理解できたのだ。一見、不条理にもみえる神の恵みは、彼の曰く「神がタダでおごってくれる愛なのだ」という。人間にとつての善行、功德を切つて捨てるかのようなダイナミックさで解説してゆく。

日本人がこの概念を理解しようとするならそれは、仏教であって、釈迦の仏教とはほど遠い浄土真宗の『南無阿彌陀仏』の中に、あえて見出す他あるまい。しかし、どんなに切り口が斬新であろうと、視点がユニークであろうと、はたまた懐疑的であろうとも、本書が第一級のクリスト教伝道書であることは間違いないのである。さらにはフィリップ・ヤンシーが、きわめて敬虔なクリスチャンであることも、疑う余地はない。

【書き出し】

自費出版とまでは考えていなくても自分の想いを何か形に残しておきたいと思っている方は多いでしょう。ところが、いざ書こうと思って机に向かったとしても、そう易々と自分の考えが文章になるものではないのが普通です。まず、書き出しの言葉が見つからない。『〇月〇日…』では日記だし『めっきり秋らしく…』では手紙みたいでつまらない。そんな書き出しを助けてくれるのが、日頃のちょっとしたメモです。あなたの手元に「三時に〇〇氏に電

本のぐらゐのアドバイス

話！』というメモがあったとします。それをヒントにして『年末に〇〇氏に電話したのがキッカケだった。』という風に書き出してみるのです。もし、主婦の方なら「〇〇日は◇◇ストアのバーゲン！」のメモから、『わたしが◇◇ストアに買い物に出掛けようとしていたところへ…』と書き出すと、次のフレーズがリアルにイメージしやすいかもしれません。文章はあまり大袈裟にかしこまって考えないほうが、書きやすいものですよ。



■編集部から 3年振りに「あうる」が復刊しました。内容は「歴史・人・本」にこだわった紙面にしました。風化しかけた物語、地域に埋もれた人物。それらは、一面の北海道秘話で蘇ります。悠々人語録では、異彩を放つディレタント（好事家）が登場します。また、少数派の書評として、マスメディアの網にかからないマニアックな一冊を紹介しつゝ、スタッフ一同、「新しい出会いと発見」をモットーに、極力読者の皆さまの意向に耳を傾けながら、コミュニケーションフィールドとしての「あうる」を目指します。

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL : <http://owl-online.jp>
E-mail : owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2008年2月18日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス！